

かわいい子猫

五年 増田 怜奈

二年前の秋ごろのことでした。学校から帰るとお母さんが、「猫の鳴き声がある。」

と、言い出したので、外へ出てみました。猫の声は、ガラガラ声で工事現場の音みたいで、かわいい声ではありませんでした。最初は姿が見えなくてお母さんとはばらくアパートの駐車場を探し回りました。

一台の車のタイヤのかけに隠れていたのは白くて毛足の長いかわいい子猫でした。私もお母さんも猫が大好きなので「おいでおいで」と声をかけました。お母さんは急いで家にあった魚肉ソーセージを少しゆでて、水と一緒に持ってきました。猫の近くにソーセージをちぎって投げると匂いをかいで食べました。私達が近づいても逃げなくなりました。

しばらくしてお姉ちゃんも帰ってきたので、二人で猫と遊びました。猫は、私達が歩くと後をついてきたり、体をする寄せてきたりして、すっかりなついてくれました。とてもかわいくて、うれしかったです。

夕方になって空が暗くなり始めました。風が強くなって寒くなりました。「このまま暖かい部屋に連れていってあげたいな。」と思いました。けれど、うちはアパートなので動物が飼えません。私もお姉

ちゃんも突然悲しくてさびしい気持ちになってしまいました。お母さんもご飯の仕度が終わって下りてきました。

「飼ってあげれないのにかわいそうなことしちゃったね。」
と猫をだっこして、なでながら言いました。

「内緒で飼ってしまえばいいの」と思いました。もう外は真っ暗です。お母さんはフカフカのタオルを小さい箱に入れて、風があたらない場所に置きました。私達は、鳴きながらついてくる猫に「ごめん」と言って、暖かい部屋に入りました。しばらく外からは猫の鳴き声がありました。私もお母さんもお姉ちゃんも、だまってご飯を食べました。

次の日の朝、箱の中にも、遊んだ場所にも猫はいませんでした。学校があるので、いつものように駅に向かいます。登校班の男の子がさげびました。

「猫が死んでる!!」

一匹の猫が車にひかれて死んでいました。私とお姉ちゃんは分かっていました。でも間違いであってほしい。そう思いながら横を通りました。鼻がツーンとして涙がじわりと出ました。悲しくて自分の足だけを見て歩きました。学校から帰って、お母さんと一緒に猫を新聞紙で包みました。お母さんも泣いていました。

昨日まであった命が突然なくなってしまうことの悲しさ、自分の力では何もできないことがあるということ、親切や優しさってなんなのかなと思った二日間でした。

今は、アパートに住んでいません。暖かい部屋に猫を連れて帰ることができます。